

成溪會誌

2002. 1 No.94



特別寄稿

成蹊会会長に就任して 専務理事通信 成蹊会通常総会開催	瀧 秀彦 岩崎英二郎 加藤 節	2 3 4
-----------------------------------	-----------------------	-------------

随想

ドイツ語とわたくし 出版界の現状と課題 成蹊大学の国際化のために 高齢化社会と年金改正について	岩崎英二郎 相賀 昌宏 廣野 良吉 佐野 忠司	8 13 13 22
--	----------------------------------	---------------------

新聞・雑誌より

昭九会の生いたちと歩み 草川信先生の授業の思い出 ニイタカヤマノボッタ 古伊万里とよばれた有田焼 鉄道屋のひとりごと こちら側に倒れた鉛筆	黒川 和雄 赤石 定次 飯島 正資 深川 一太 水上 陽介 後藤 均	24 25 26 28 30 31
--	---	----------------------------------

有訓無訓

エグゼクティブの自由時間	住田 正二 林 正道	33 34
--------------	---------------	----------

成蹊会へのQ & A / 5

成蹊会「総務企画委員会」設置のお知らせ / 12 「谷岡基金」終了について / 12 表紙の言葉 / 21 四大学運動競技大会 / 49 叙勲 / 57 予告 / 57 会員動静 / 58 物故会員 / 70 第六回成蹊会学術賞 / 71 第41回成蹊会謝恩顕彰会 / 72 成蹊学園の近況 / 74 学園史料館 / 80 大学図書館 / 82 アジア太平洋研究センター / 83 75周年を迎えた成蹊気象観測所 / 84 成蹊会ホームページ・Eメール / 85 二〇〇二年度就職活動に力強い支援を / 86 成蹊会報告 / 89
--

同窓のつどい

●千葉支部創設50周年	36
●東海支部50周年記念祝賀会	38
●関西支部設立50周年	40
●学校・年次会・ゼミOB会のつどい	42
宇野ゼミ同窓会 小学校卒業50周年 昭和26年度(ブレメ・政経)入学50周年 高校卒業20周年 南寮一室の会 全蹊オープン参加 大学卒業40周年 旧高24回懇親ゴルフ会	
●体育会・文化会OB会	45
旧高ラガーマンの集い バトミントン部創部50周年 成蹊ラグークラブ現役選手激励会 ギタースァエティーOB・OG会総会 合気道部設立30周年 大学グリークラブOB会「ハモる会」	
●業界・企業・趣味のつどい	48
東京海上成蹊会 成蹊法曹会 山武グループけやき会 成蹊教育研究懇話会 日本信託銀行OB会	
●地域のつどい	50
上海成蹊会 オーストラリア・クイーンズランド成蹊会 山形成蹊会 新潟成蹊会 茨城成蹊会 澁谷成蹊会 岐阜成蹊会 岡山成蹊会 中国支部・広島成蹊会総会 福岡成蹊会ビアパーティー 成蹊会九州支部総会・長崎成蹊会 佐賀成蹊会	
●寮歌祭	56
信州寮歌祭 横浜寮歌祭 東海学士会寮歌祭 広島寮歌祭	

表紙の題字は故上條信山先生、絵は寺尾 寿(政経・27年)

成蹊会会長に 就任して

たき 瀧 ひでこ 彦 秀

6月23日成蹊学園キャンパス内で開催された通常総会後の理事会において会長に選任され、この大役をお引受けさせて頂きました。

成蹊会会長の職は歴代旧制高等学校の先輩方の中でも選り優りの素晴らしい経歴と実力を持たれた方々が就任され、成蹊会の基礎造りと今日の発展を



支えていただきました。

成蹊会の歴史の中で、今回はじめて成蹊大学の卒業生が会長となり、責任の重大さを実感し身の引き締まる思いをいたしております。

前会長岩崎英二郎氏は、3期6年に亘り成蹊会の改革に真摯に取り組み、財政の健全化、役員の若返りによる組織の充実、学園との関係改善などの諸問題を着実に解決されその成果が顕著に現われてきています。私もこの流れを踏襲し、微力ながら更なる改革の成果を高めて行きたいと考えています。

私は、昨年春岩崎前会長より「成蹊会の今後のあり方について検討してほしい」との諮問を受け、各同窓会より問題意識の高い7名のメンバーと、事務局から2名を加えて「チーム21」と言うチームを組み、成蹊会の現状分析、問題点の発見と整理、その課題解決の方法を精力的に検討してきました。

諮問の趣旨は次の通りです。

- 1、当会の組織人員は大学卒業生が8割強を占める現状にそぐわぬ面も多々発生し、会全体が「制度疲労」を起こしかけてないか。
- 2、会員増加に反し、年会費納入会

員の減少（成蹊会への無関心層の増加）、資金運用益の極端な減少などにより財政的にも危機的な状況におかれています。

この基本的解決策はあるか。

3、当会は社団法人成蹊会としての公益法人であり、当局の指導で、現在の定款を見直す必要にせまられている。

以上の事を踏まえ、成蹊会の総ての事柄について、タブーなしにフラットに論議してほしい。

この諮問の内容に添って検討をすすめ、成蹊会の通常総会の改善など、早期に実現したい当面の施策と、中長期的検討課題を整理して中間答申を行い、理事会の承認を得てまいります。

今回「チーム21」はチームリーダーをメンバーの一員だった政治経済学部3回卒業の山本亨介氏にお願いし、検討を継続していただくことにしました。新チームでの積極的な検討と、建設的な諸提案を期待している次第です。

成蹊会の活動は定款4条に規定されている「この法人は、学園建学の精神の発揚を促進し、学園の後援及び育英を行うとともに、会員の親睦研修を図

り、もって教育の発展に寄与することを目指す」と言う条項の内容を達成することが基本だと思っています。

成蹊会の現状を踏まえ次の点に注力して行きたいと考えています。

1 卒業生にとって成蹊会をより意義のある、身近なものにする。

2 上記活動の源泉としての収入の道を開拓、確立し増収を図る。

3 上記活動を健全かつ効率的に実施するために組織形態、運営方法を改善する。

多くの困難な問題を含んでおりますが、会員各位のご協力を得てより良い成蹊会づくりを推進して参りたいと思います。

また、少子高齢化の時代にあつて学校経営の将来に多くの困難な問題を抱えている現状の中で、母校「成蹊学園」が未来永劫社会的評価の高い学園であり続けるために卒業生としてどのような後援が必要なのか、どのような後援が出来るのか、真剣に考えて行かなければならないと思っています。

会員各位のご支援、ご理解、ご協力を得て、数多くの建設的なご提案をいただき、課題解決を図るなかで成蹊会の健全な発展に貢献出来れば幸いです。

成蹊会会長 辞任にあたって

い わ さ き え い じ ろ う
岩 崎 英 二 郎

去る六月二十三日の総会を機に、成蹊会会長を退任いたしました。

三期六年の歳月は、長いようでもあり、過ぎてみれば案外短かったような気もいたしますが、六年前に本誌掲載の就任の辞にも書きましたように、生来の非力非才、会員の皆様方の御期待に充分にはお応えできなかったこと



を、まことに申し訳なく存じております。

後任の会長には政治経済学部卒業の瀧秀彦さんが就任されました。

皆様も御存知のように、これまでの会長はすべて旧制高校の出身者ばかりでしたが、成蹊大学の卒業生が会員の大半（正確には八割以上）を占めている現状にかんがみて、そろそろ大学の卒業生に御苦労を願ってはどうかという考えが、旧理事会の大勢を占めていたような気がいたします。私もその方向にむかって努力いたしました。その判断はやはり正しかったと確信しております。

旧制高校同窓会会長の島尾和男さんがある会合の席上で「岩崎前会長の最大の功績は、瀧新会長の誕生を可能にしたことだ」と言われました。島尾さんの冗談まじりのこのお言葉は、瀧さんが成蹊会の会長としていかに打ってつけであるかを、またこれまで成蹊会の理事であった瀧さん、政治経済学部同窓会の会長であり、成蹊学園の理事でもあった瀧さんが、同僚たち、仲間たちからいかに愛され、いかに信頼されていたかを、端的に物語っていると思います。

過日の総会の折にもお話ししたこと

ですが、成蹊会が社団法人として認可されて正式に発足したのが昭和三十年（一九五五年）、当時の会員数はわずかに千五百名ほどでした。会員の数が六万五千人を超えた現在と比べると、文字どおり隔世の感があります。

当時と現在の違いは、会員の数だけではありません。創立当時の会員の大部分は旧制高校の卒業生でしたから、小学校から高等学校までの十三年間、あるいは尋常科から高等科までの七年間という多感な年頃を、いわゆる一貫教育のもとに共に過ごしてきただけに、お世話になった成蹊学園への卒業生たちの思いはそれだけいっそう深いものがあつたはずで、現に私自身の同窓の仲間たちも、多かれ少なかれ、みないまだにそのような思いを抱えています。しかし四年間を成蹊大学で過ごしただけの現在の大多数の卒業生にそれを求めるのは、そもそも無理な話だと思ひます。

これは単に一つの例に過ぎませんが、何はともあれ、五十年にも満たない短期間のうちに量的にも質的にもこのような激しい変化にさらされてきた成蹊会は、そしてたださえ同窓会と公益法人の両立という困難な問題をかかえている成蹊会は、いまこそ初心に

戻って、その存在意義について、また今後のその在り方について、改めて問い直さなければならぬのではないのでしょうか。

そのような反省の気持ちを籠めて私は、昨年の四月に、会長の諮問機関としていわゆる「チーム21」を発足させ、二十一世紀の成蹊会がいかにあるべきかについて、タブーなしに、小泉流に言えば「聖域」を設けずに、さまざまな角度からの検討をお願いしたのですが、そのチームリーダーとして精力的に仕事を進め、中間報告をまとめてくださったのが、ほかでもない瀧秀彦さんでした。その瀧さんが今度成蹊会の会長になられたのですから、今後の成蹊会について会員の皆様にも大いに期待していただけたと思います。

それと同時に、そもそも会員の理解と協力なしに会の発展はあり得ないので、今後新しい理事会が提案するであろうさまざまな施策に対する会員の皆様の御理解と御協力を、前会長としても心からお願ひ申し上げる次第です。そして会費の納入もどうかお忘れなく。



成蹊会会長 辞任にあたって

いわさきえいじろう
岩崎英二郎



去る六月二十三日の総会を機に、成蹊会会長を退任いたしました。

三期六年の歳月は、長いようでもあり、過ぎてみれば案外短かったような気もいたしますが、六年前に本誌掲載の就任の辞にも書きましたように、生来の非力非才、会員の皆様方の御期待に充分にはお応えできなかったこと

を、まことに申し訳なく存じております。

後任の会長には政治経済学部卒業の瀧秀彦さんが就任されました。

皆様も御存知のように、これまでの会長はすべて旧制高校の出身者ばかりでしたが、成蹊大学の卒業生が会員の大半（正確には八割以上）を占めている現状にかんがみて、そろそろ大学の卒業生に御苦勞を願ってはどうかという考えが、旧理事会の大勢を占めていたような気がいたします。私もその方向にむかって努力いたしました、その判断はやはり正しかったと確信しております。

旧制高校同窓会会長の島尾和男さんがある会合の席上で「岩崎前会長の最大の功績は、瀧新会長の誕生を可能にしたことだ」と言われました。島尾さんの冗談まじりのこのお言葉は、瀧さんが成蹊会の会長としていかに打ってつけであるかを、またこれまで成蹊会の理事であった瀧さん、政治経済学部同窓会の会長であり、成蹊学園の理事でもあった瀧さんが、同僚たち、仲間たちからいかに愛され、いかに信頼されていたかを、端的に物語っていると思います。

過日の総会の折にもお話ししたこと

ですが、成蹊会が社団法人として認可されて正式に発足したのが昭和三十年（一九五五年）、当時の会員数はわずかに千五百名ほどでした。会員の数が六万五千人を超えた現在と比べると、文字どおり隔世の感があります。

当時と現在との違いは、会員の数だけではありません。創立当時の会員の大部分は旧制高校の卒業生でしたから、小学校から高等学校までの十三年間、あるいは尋常科から高等科までの七年間という多感な年頃を、いわゆる一貫教育のもとに共に過ごしてきただけに、お世話になった成蹊学園への卒業生たちの思いはそれだけいっそう深いものがあつたはずで、現に私自身の同窓の仲間たちも、多かれ少なかれ、みないまだにそのような思いを抱いています。しかし四年間を成蹊大学で過ごしただけの現在の大多数の卒業生にそれを求めるのは、そもそも無理な話だと思えます。

これは単に一つの例に過ぎませんが、何はともあれ、五十年にも満たない短期間のうちに量的にも質的にもこのような激しい変化にさらされてきた成蹊会は、そしてたださえ同窓会と公益法人の両立という困難な問題をかかえている成蹊会は、いまこそ初心に

戻って、その存在意義について、また今後のその在り方について、改めて問い直さなければならないのではないのでしょうか。

そのような反省の気持を籠めて私は、昨年の四月に、会長の諮問機関としていわゆる「チーム21」を発足させ、二十一世紀の成蹊会がいかにあるべきかについて、タブーなしに、小泉流に言えば「聖域」を設けずに、さまざまな角度からの検討をお願いしたのですが、そのチームリーダーとして精力的に仕事を進め、中間報告をまとめてくださったのが、ほかでもない瀧秀彦さんでした。その瀧さんが今度成蹊会の会長になられたのですから、今後の成蹊会について会員の皆様にも大いに期待していただけたと思います。

それと同時に、そもそも会員の理解と協力なしに会の発展はあり得ないので、今後は、今後新しい理事会が提案するであろうさまざまな施策に対する会員の皆様の御理解と御協力を、前会長としても心からお願ひ申し上げる次第です。そして会費の納入もどうかお忘れなく。



専務理事 通信

かとう 加藤
たかし 節

成蹊学園九十周年

― 御報告とお願い ―

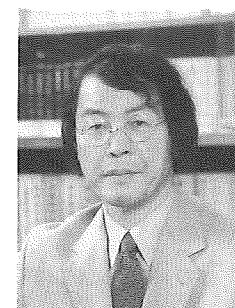
卒業生の皆様

成蹊学園は、成蹊実務学校が設置された一九一二年を開設の起点としておりますので、来年二〇〇二年をもって開学九十周年を迎えることとなります。そこで、学園は、この区切りの年に当たり、来年五月一日（土）に挙行予定の記念式典とは別に、以下の四つの事業を行うことにいたしました。それらは、いずれも、数多くの優れた人材を輩出し続けてきた学園の歴史を振り返るとともに、将来に向けて新たな一歩を踏み出すことを目的とするものに他なりません。

第一の事業として、中村浩『成蹊教育―その源流と展開』の再刊を企画しています。これは、時間が経過し世代

交代が進む中で、学園関係者においてさえ中村春二の精神にふれる機会が著しく失われてきている現在、成蹊教育の原点をあらためて振り返ることが重要な意味をもつという判断にもとづくものです。

第二に、来年度から、学園が開設百周年を迎える二〇一二年の刊行を目指して学園百年史を編纂する事業に着手したいと思えます。言うまでもなく、曲折に富んだ日本の近代史と重なる学園の一世の歴史を辿ることは、関係者からの聞き取りや、関連資料の収集・整理も含めて大変な困難が予想される事業です。しかし、日本の教育史の中に独自の位置を占める成蹊学園の歩みの記録を残すことが極めて大きな歴史的意義をもつことは、改めて述べるまでもありません。そうした自覚の下、今後、多くの皆様の御支援と御協力とをいただきながら、学園を挙げて



学園百年史の編纂作業に取り組んで行きたいと考えております。

第三の大きな事業として、学園は、来年度を期して募金委員会を組織し、本格的な募金活動に着手することを計画しております。他の学園に比べて、成蹊学園はこれまで募金活動に必ずしも積極的ではありませんでした。

その背景には、自分の足で立つべき私立の学園として、可能な限り自前で教育・研究のための資金を調達したいという理念があったように思われます。

学園の自立性を確保するためにも、こうした理念は今後も堅持しなければなりません。しかし、他方で、学園が、現在、少子化に伴う収入減と公的補助の減額とが進む中、成蹊学園の伝統を将来にわたって維持するための恒常的な財政基盤を確保する切実な必要性に迫られていることも事実です。

しかも、その必要性は、今後ますます強まるものと考えられます。急速に進展する国際化と情報化に対応した教育・研究活動を展開するために、学園が従来とは比較にならないような経費負担を強いられることは避けられないからです。どうかそうした点を御理解いただいて、卒業生の皆様を始めとする関係各位が来年度からの学園の募

金活動に是非とも御協力下さいますよう、この場を借りて心からお願い申し上げます。

更に第四の事業として、学園は、定評のあるウイーン・アルカディア・ピアノ・カルテットを招いて九十周年記念フレンドシップ・コンサートを来年一〇月一九日（土）に開催することを企画しています。そこには二つの希望が込められております。一つは、音楽を通じて国際交流を深めることです。

成蹊大学管弦楽団にこのコンサートへの参加をお願いしたのは、そのために他なりません。もう一つの希望は、このコンサートを聞くことによって、成蹊学園を、今まで以上に文化発信の場として行きたいという決意を示すことです。率直に申し上げて、これまでの学園には、生き生きとした文化を創造し、それを社会に向けて積極的に送り届けるという姿勢が相対的に弱かったことは否めないと思えます。今回企画したコンサートを、そうした方向へと学園を変革して行く一つのきっかけにしたいと考えております。

卒業生の皆様が学園が計画している以上のような九十周年記念事業をどうか御支援下さいますよう、ここに改めてお願い申し上げます。

成蹊会へのQ & A

成蹊会事務局では、会費納入等に関する会員の皆様からのご質問・お問い合わせについては、可能な限り速やかに回答してきております。

ご質問・問い合わせいただいた方には次のような回答をしておりますのでご紹介しておきます。

質問 1. 終身会費制選択の会員の年会費納入について

【回答】昭和30年成蹊会が社団法人として組織変更した際、会費制度は終身会費制と年会費制の二本立てとし、いずれかの選択制となりました。

しかし、昭和48～9年のオイルショックを経て、このままでは近い将来、成蹊会は財政危機を招来しかねないとの懸念から、昭和52年5月の理事会及び同6月の総会での定款改訂の中で、会費制度は根本的に改められました。

即ち、昭和53年からは終身会費制を廃止し、入会金制を導入して、全ての会員は『入会金＋年会費』を納めて頂くこととなりました。

これに伴い、以降の取扱いは次のとおりとなりました。

- (1) 終身会費制選択の会員 …………… 以降は年会費を継続的に納入して頂く
- (2) 年会費制選択の会員のうち
 - ① 当時、年会費の継続的な納入者 …………… 以降も年会費を継続的に納入して頂く
 - ② 当時、年会費未納者 …………… 初回に限り、基本会費（現在の入会金に相当）＋年会費をセットで、以降は年会費を継続的に納入して頂く

（注）現在、基本会費は10,000円 年会費は3,000円

なお、この会費制度の改定事情の説明や以降の取扱い等について、当時の会員の皆様へのご説明が不徹底であり、十分なご理解が頂けなかったことを深くお詫び申し上げます。

質問 2. 年会費の過年度未納分について

【回答】年会費の納入は過年度未納分については免除しております。当該年度分からの納入で結構ですから、以降お忘れなく継続して納入下さるようお願いいたします。なお、年会費の納入には便利な自動払込制度もあります。自動払込みの手続き用紙は、事務局までご請求下さい。

質問 3. 隔年払いの年会費の納入年について

【回答】年会費の納入金管理は個人別に本部事務室のコンピュータで行っています。成蹊会誌等に同封されて『金額欄6,000円』の郵便振替用紙が送られてきた場合は、年会費2年分の納入年に該当している旨のお知らせです。折り返し、同用紙を使用して、2年分の年会費（1年分だけの納入希望者は各自金額欄を訂正）の納入をお願いします。また、『金額欄が無記入』の郵便振替用紙が同封されて送られてきた場合は、寄付金のご協力をお願いするお知らせです。（年会費は納入済み）

成蹊会の事業活動の充実のため、皆様のご理解とご協力をお願いします。

略歴

大正11年生まれ

昭和10年3月 成蹊小学校卒業

昭和17年3月 成蹊高等学校(旧制)卒業

昭和17年4月 東京帝国大学文学部 獨逸文学科入学

昭和19年12月 同 卒業

昭和20年12月 (戦時特例による繰り上げ) 東京大学副手

昭和21年12月 同 助手

昭和22年4月 成蹊高等学校(旧制) 教授

昭和24年4月 同(新制)教諭

昭和26年7月 (兼 成蹊大学助教) 埼玉大学文学部 専任講師

昭和29年4月 東京教育大学文学部 助教

昭和34年4月 東京大学教養学部助教

昭和44年5月 東京大学教養学部教授

昭和45年4月 慶應義塾大学文学部教授

昭和63年4月 独協大学外国語学部教授

平成4年3月 同 退任

平成12年 学士院会員

現在 慶應義塾大学名誉教授



成蹊会「総務企画委員会」設置のお知らせ

岩崎前会長の諮問を受け、2000年4月にスタートした「チーム21」は、活動・組織・財務の面から、成蹊会の問題点の把握と改善に向けて作業を実施し、2001年2月に当面の施策と中長期的な提案事項を岩崎前会長に中間答申しました。一部の施策については理事会に諮られ、すでに実行されています。

(年次総会の改善、理事と評議員の兼任禁止、谷岡基金の使用目的特定)。

第46回総会後の理事会において、瀧会長が就任したことを機に、これまでの中間答申での中長期的な課題をより具体的に提案・解決していくための特別委員会を、成蹊会に設置すべく、先の理事会に提案し、承認を受けました。ここに「チーム21」は発展的に解消し、「総務企画委員会」が発足しました。

「総務企画委員会」は、成蹊会の健全化並びに活性化のために成蹊会事業活動全般に関わる企画立案機能

を持った委員会として、今後活動していきます。

委員会の当面对処すべき課題は

- (1) 事業、企画の充実
- (2) 広報活動の充実
- (3) 大学4学部同窓会活動の活性化
- (4) 役員、委員及び役職者の選任ルール
- (5) 会員の定義の明確化
- (6) 地域同窓会の在り方
- (7) 事務局の在り方
- (8) 特別委員会の在り方
- (9) 財政の健全化、安定化
- (10) 年次総会の運営改善
- (11) 学園との連携強化

などがあります。

なお、委員構成は、発足当初は「チーム21」のメンバーを中心としませんが、委員会の性格から、専門知識を有した人材を今後加えて運営していくことが望ましいと考えています。

「谷岡基金」

終了について

長年にわたり成蹊会の発展に寄与されました谷岡喜久蔵氏が会長職を退かれた翌8年、岩崎英二郎前会長はじめ有志の方々の発意により創設されたのが「谷岡基金」です。

当初は同年中に終了する予定でしたが、引き続き賛同がありましたので今日に及んでいます。

「谷岡基金」には個人67名・3団体から合計2,370万円を賜りました。(平成13年8月1日現在)

この基金の使途は未定でしたが、平成13年成蹊会の機関(理事会・評議員会・総会)決定により、成蹊会の公益部門の事業基金として新たに創設された「文化振興基金」に「谷岡基金」の全額を移し、成蹊会の事業活動の維持発展のため、文化振興事業を中心に活用させて頂くこととなりました。

つきましては、「谷岡基金」を窓口としてのご寄付の受け付けは14年3月末日で終了させて頂くこととなります。「谷岡基金」へお寄せ頂いた皆様のご厚情に深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

同窓の

つどい

千葉支部 創設五十周年

記念総会・懇親会を 盛大に開催！

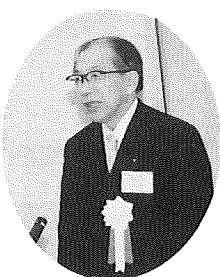
「後輩の続き来ることを思い」をテーマに

平成十三年七月七日、千葉市中央・千葉商工会議所十四階・第二ホールで五十周年記念総会が開催されました。出席者一〇〇名。
午後四時半、総会司会者・酒井四平幹事（政経2回）により開会宣言。千葉支部初代支部長、故・香月秀雄先生をはじめ物故会員への慰霊黙禱の後、嶋村欣一支部長（旧高18回）が療

敬一氏（政経2回）を新支部長に推し、新世紀での一層の充実、発展を願う」と結ばれた。当日は嶋村支部長夫人・米子様が代理出席され、終始総会を見守っておられた。今回の記念行事は、一年がかりで準備した実行委員会と事務局の連携作業によって運営され、成蹊創設者・中村春二先生の「處世七則」の一つ「後輩の続き来ることを



成蹊会新会長 瀧 秀彦氏



新支部長 安田敬一氏

「五十周年の歩み」編集配布等）が盛り込まれていた。来賓として出席された成蹊会新会長の瀧 秀彦氏（政経9回）は、千葉支部創設五十周年の賀詞に加えて、先輩方が遺された伝統を生かして母校成蹊と成蹊会の発展への協力を呼び掛けられた。

議事は、議長・安田新支部長のもとに進行し、酒井幹事より平成十二年度会計報告の後、新役員は新支部長に一任。幹事は新たに各学部出身者を選任し、人事の若返りを図ること、規約の一部を改正し、副支部長二名、従来の事務局を、事務局長のもとに新幹事より二名の担当を置き、将来に備えて組織の充実を図る旨の提案

があり満場一致で可決された。

五十周年に当たり、嶋村前支部長の永年にわたるご尽力に感謝し、退院ご快癒を祝い、また、安田新支部長の多年のご尽力と叙勲（勲五等瑞宝章）を祝って、久我太郎幹事（旧高16回）の熱情溢れる祝辞の後、高橋啓子実行委員（政経17回）、中部智子会員（文14回）より花束贈呈。嶋村前支部長夫人と安田新支部長の謝辞があり、総会議事は盛況裏に終了した。

今回総会での目玉は、元千葉大学学長・井出源四郎先生の講演

成蹊会千葉支部 創設



元千葉大学学長・井出源四郎先生の講演



前支部長・嶋村欣一先生名代・米子夫人に花束贈呈

演。演題は『日中文化交流と私』。医学者であり日中交流に豊富な体験を持たれる先生のユーモアと貴重な体験談に満場大喝采だった。この日のために特別参加した千葉県在住の中国人医師、技術者、学生七名も井出先生の日中文化交流談義を聴いたあと、出席してよかったと言い合っていたのが印象的だった。

記念行事第二部・懇親会は、若手実行委員の満藤庸也実行委員（経7回）の陣頭指揮で進行。同ビル九階の



特別参加の中国人医師の技術者たちとの交流

会場「レストラン・ピープル」での幕開けは、副支部長・深澤勝彦氏（政経7回）の挨拶に続き、駆け付けてくださった成蹊大学長・柳井道夫先生（高4回）の現況報告。前成蹊会長・岩崎英二郎先生（旧高15回）の音頭で乾杯、五十周年記念の賛歌が繰り広げられた。随所に容易された心尽くしの料理や酒樽もびっくりするほどの売れ行き。歓談・歓声で、飛び入りのスピーチの声も聞こえ難いほど。（詳細は割愛させていただきます）実行委員のリードで校歌斉唱、午後8時、懇親会は盛況裏に終了した。

五十周年記念総会・懇親会の成功は成蹊会本部のご協力、先輩会員の支援と若手実行委員、事務局のチームプレイでユニークな記念行事が開催できたことを重ねて記し、感謝申し上げます。

園田信行（政経・30年）

「同窓の集い」に
「寄稿下さい」

五百字（写真付の場合）
八百字（写真無しの場合）
締切 いつでも結構です。

ご注意

最近「成蹊会」の〇〇と称して、商品取引を勧誘したり、名簿を発行するからと申し込み葉書を送りつけたら、学校・学部の創立周年祝賀広告を求めるケースが目につきます。
（成蹊会の同窓会業務とは、全く関係ない営業活動ですので、ご注意ください。）



千葉支部新旧世代一堂に会して